

いのちをつなぐ ～十七回忌の心境～

私は、犯罪被害者遺族を辞めたいと思う。

私は、がん患者であることを辞めたいと思う。

私は、声が出せないという障がい者であることもやめたいと思う。

そして、私は、私でありたいと思う。

二〇二一年(令和三年)バイク事故で息子が亡くなって十七年過ぎた。長いのか、短いのか、わからない。辛いこともあった。寂しいこともあった。突然涙が溢れることもあった。今も息子に会いたい思いはつのるばかりだ。

私のがん患者になって十二年。死を覚悟しながらもひたすら生きてきた。二年前には咽頭がんの手術をして声が出せなくなったので障がい者になった。手術のあとが痛いし、体力も落ちた。楽しみだった季節の登山もウォーキング大会も苦しくて参加できなくなった。声が出ないので、講演活動も休止した。生きる目標も楽しみも見つからなくなった。こうなってみると考えることは命のことばかりである。

亡くなった息子の怜志は、どこへ行行ってしまったのだろうか。私が怜志のことを忘れたわけではないが、怜志の死が私を苦しめることは少なくなった。娘に孫ができたので、怜志が遠慮して私の前にも現れなくなったのかもしれない。それでも突然怜志の思い出が甦って涙がこみあげてくることがある。今も怜志の命は大切に重いものであることに違いない。

息子が交通事故で突然亡くなってから、私は犯罪被害者遺族となった。それ以来、そのことが私のレッテルや看板となったばかりか、自分自身の心の中まで呪縛から逃れられなくなったような気がする。私は、遺族としてやらなければならないことを二つ考えていた。一つは、息子の怜志のことを多くの人に知ってもらうこと。そのことが息子の供養であり、命を大切にすることを涵養することにもなると思っていた。もう一つは、犯罪や事故を減らし、命を大切に社会づくりに貢献すること。被害者や遺族が黙ってしまえば社会の変革はまったく進まないと思うからだ。

この二つは間違っているとは思わないが、その反面、私はずっとこんな課題を背負い続けてきた。その一つは社会一般の人の目である。犯罪被害者や遺族のことをかわいそうだと思って優しく接してくれたり同情してくれたりするが、それはわかりやすく言えば「上から目線」なのである。さらにもう一つの課題は、私自身の心の闇である。かわいそうだと思われたくない気持ちの反面、かわいそうだと同情されたい気持ちがあるのだ。

講演活動に取り組んでいると、講師として持ち上げられ丁寧に対応してもらえるので、自分が偉い人になったような勘違いをしてしまう。私はテレビや新聞にも取り上げてもらったり、大きな会場で講演させていただいたりしたので、まるで有名人になったような気分の日もあった。そんなとき、私がいつも心に刻んで忘れないようにしていたのは、「私は怜志のことを話しているだけで、感動したと言われてもそれは怜志への賛辞なのだ。」ということだった。私がやっていることは父親としての責務なのだと自分をいさめてきた。しかし、徐々に背負った課題が重荷になってきてしまった。

突然息子がいなくなってから、私の人生は二転三転してきたが、毎日息子のことを忘れたことはない。何でも息子と相談しながら一緒に生きてきたつもりだ。生前の息子が『人のためになることがしたい。』と言っていたので、私も息子に負けずに社会のために前を向いて進んでいくしかなかったのだ。

十七回忌を迎えるにあたって、息子の友人の皆さんへこんなお手紙を差し上げた。「今年の十二月一日は十七回忌にあたります。家族だけで法要を済ませる予定であります。思い返すと年月が過ぎるのは、本当に早いものです。もう十六年も過ぎたとは思えません。毎年、毎日、怜志のことを思い出しては、悲嘆を乗り越えて生きていこうと努力してまいりましたが、それはひとえに皆様のご厚情のおかげと心より感謝申し上げます。仲良くしていただいた同級生の皆様が、就職されたときや結婚されたとき、出産されて赤ちゃんを連れて来られたとき、仏壇の怜志もきっと喜んでいたと思います。もちろん家族の私たちは、皆様の幸せを自分の家族の幸せのように感じておりました。いつも命日には、みんなががんばってるから泣いてなんかられない、と決意させられました。もし、友達が誰も来てくれない寂しい日々が続いたら、きっと悲しい気持ちはいつまでも続いたに違いありません。

というものの、いつまでも皆様に甘えていられません。いつかけじめをつけなくてはいけないと考えていました。今年は残念なことにコロナ感染予防対策で人が集まることも敬遠されておりますし、十七回忌を節目として、今までのように十二月一日に無理して都合を付けていただかないようお願いしようと家族で話し合いました。私たちはもちろんですが、怜志も笑いながら「それがよかばい。」と言っています。怜志は、十六年も過ぎたのでおじさんとなって世界中を駆け回っているように思います。でも、皆様の近くへは、ときどき風となってお邪魔していると思います。家族の元へもときどきやってきているようです。ふと怜志の声や笑顔、臭いや気配を感じることがあるからです。怜志は、以前悲しくて寂しい様子でしたが、今は友達の皆様との思い出を胸に抱いて、皆様の明るい笑顔に負けられないように笑顔で夢に向かってがんばっていますから、仏壇にも墓地にも怜志はいません。きっと皆様が会いたいと思っていただければ、そばに帰ってくるはずです。これからは、命日やお盆ばかりでなく、いつでも怜志に会えると思っていただきたいと思っています。これまで怜志のことを忘れず、家族までも励ましていただきましたことに心から感謝しております。本当にありがとうございました。」

私は、自身の命に区切りがあるように、自分の背負った課題もひとつひとつ区切りをつけることに決めていた。こうして、今年は家族だけの静かな命日を迎えた。十七回忌の読経を聴きながら、会いたいという気持ちだけはつのるばかりだった。怜志はどこへ行ったのだろうか、もう一度会えるのだろうか。私はまだ生きている。今、願うのは、もう一度怜志に会いたいということだけだ。それが不可能な願いであるのは、十分承知しているが、それ以外の願いは何もない。怜志が亡くなってから怜志とともに歩んだ十七年の日々も、本当に有意義だった。目を閉じると、私が生まれてから出会った人たちの顔が次々に浮かんでくる。幼なじみの友人、学校の同窓生、一緒に汗を流した仲間、同じ学校で勤務した同僚、かわいがってくれた先輩、がんやボランティアで知り合った友達、そして娘や息子が生まれた家族での思い出、怜志が生きている頃の思い出と亡くなってからの思い出。本当に楽しかった日々。

ああ、もう一度会いたいよ、怜志。私は、これからどうすればいのちをつなぐ生き方ができるのだろうか。私は背負った荷物をおろして、自分の好きなように生きていくのは悪いことだろうか。

今も私の心の中にはっきりと甦ってくるのは、初めてくじゅう連山で出会ったリンドウの花である。亡くなった怜志のように見えた。怜志の命に見えた。怜志の命は亡くなくても私は生きているし、この世は存在している。リンドウは踏みつけられても毎年花を咲かせ、命を謳歌している。なんと自然の命の美しい姿であろうか。命とは、自然そのものである。息子が亡くなったのも私が亡くなるとしても自然の営みである。そう、リンドウの花が咲き、踏みつけられ枯れても翌年にはまた別な花が咲き誇るのが自然であるように人の命も未来へ向かってつながっていく。無念の思いを持って亡くなった怜志の命もきっと未来へつながっていくに違いない。怜志の命は、きっと自然の中に溶け込んで、リンドウの花となって咲いているかもしれない。私も、できればリンドウになりたい。踏みつけられても自然の中で花を咲かせ、自然の中で根をはって生きていく。一つの花ではなく、たくさんの花が集まってリンドウになっているのだから、枯れてもリンドウは残り、翌年はまた別の仲間が花を咲かせる。リンドウでさえ、こうして命をつないでいくのだ。

何も恐れることはない。

「ああ、もう一度怜志に会いたい。」というその気持ちだけが真実だ。怜志が亡くなってから十七年生きて、最後に私に残った真実は、その気持ちだけだ。それが、私の人生の真実であり、いのちをつないで生きていく意味なのだろう。いのちをつなぐとは、心をつなぐことである。体験を共有し、共感的に理解し合うことで心がつながっていく。そのために最も重要なものは言葉である。人は、言葉によって思考し表現する。言葉によって知識を獲得し、言葉によって人とつながるのである。そして、言葉によって心を伝えるのだ。いのちをつなぐとは「言葉」をつなぐことである。

そこで私は「いのちをつなぐ」という本を自費出版することで、息子やがん患者の命をつないで穏やかに最期を迎えたいと思った。ところが、私の娘にがんが発見されたのだ。私は自分のがん告知よりも辛い知らせだった。それは代わりたくても代われないからだ。娘や孫の辛い人生を見るくらいなら私は早く死ねば良かったと思う。いのちをつなぐのではなく、がんをつなぐことになってしまった自分の人生を悔やむばかりだ。

声を失った私は、崖の上から「がんばれ」と言われてもがんばろうと思えなくなった。がんばって崖を登ろうとしても「無理するな」と言われるだけだ。私は、本当にもう自分一人でいたいしと思えなかった。息子ばかりでなく娘の命の危機にさらされ、私は崖を登っていく気力がなくなってしまった。

それでも、四歳の孫の屈託のない笑顔を見ていると、また新しい小さな希望が見えてくる。娘の家族は、きつのがんの苦しい闘病を克服して明るく生きていくにちがいない。私も精一杯の娘のがん闘病を応援しながら、自分のがん闘病も続けていきたい。過去を振り返ることはできるが、過去を改めることはできない。未来を予測することは難しいが、未来を生きぬいていくことはできる。どんなことがあっても、いのちのある日々を大切に生きぬいていくことが、唯一の「いのちをつなぐ生き方」なのだから…。

私は、憎しみも怒りも嫉みも捨て、被害者としての責務や社会貢献などの重荷を下ろし、がんも障がいも悔やむことなく、私は私らしく家族とともにリンドウのように生きていきたいと思う。